

古代インドの医学覚書

歯学部 山根哲哉

Tessai YAMANE: Medicine in Ancient India

(1977年11月15日受理)

日本歯科大学紀要

第 7 号

1978年3月

BULLETIN OF NIPPON DENTAL UNIVERSITY, GENERAL EDUCATION

古代インドの医学覚書

今年の夏は、百年来の暑さだそうだが、夏によわい私は、この永い暑さに閉口し、読書は深夜の冷気を盗んですることに決め、11時から3時ごろまで相当量の本を読破した。

暑中見舞も30枚と、例年になく多く拝受した。そのなかに、医学図書出版会社の社長金原四郎氏の葉書があり、その文に“杖国を過ぎること六歳”という語があった。この熟語を見るのは30数年振り、大変この語が懐かしかった。昔、代々木にいた友人の作家江馬修氏からの年賀状に“杖家にはいまだ”とあったのを思い出した。それで、私は深夜“杖朝を過ぎること一歳”と草書して、返礼としたが、今時、こんな「礼記」にある語をつかう人は稀れになった。やはり年齢と時代の流れだと思う。

この杖朝を越えた今、お経を読んでいるといえ、笑う方もあろうかと思うが、これは今に初めたことではなく、昭和2年ごろ、円覚寺管長の宗演老師の「碧巖録」を読んでいたことで、時間をつくっては、今も仏典を読んでいる。

キリストのバイブルを研究する人は、よく見かけるが、お経を読んでいる人をあまり聞かない。従って今の人は、“お釈迦さん”とは名前だと思っている人や、お経に何がかいてあるのか知らない人が多い。

釈迦（シャカ）とは、インドの北西にあったマガダまたはマケイダ（摩揭陀）という国の北端にいた種族の名前で、シャカ族ということ。そして小さいながらも王国で、その首都はカピラヴァストウ（迦維羅衛城 Kapila-Vastu）といった。お釈迦さんは、そのカピラ城の浄飯王（シュツドーダナ）を父とし、摩訶摩耶（マカマヤ）夫人を母として、ルンビニー園内の無憂樹の花の下に生れたといわれている。

王夫妻は王子誕生を喜んで悉達多（シッダルタ）と命名した。梵語では“目的成就”という意味だそう。古代インドでは仏教の開祖を“仏陀”（ブッダ）と呼び、西洋でもそう呼んでいた。“ブッダ”は“覚者”又は“真理をさとった人”という意味で、個人的に呼ぶときは、“シャカ”の属していた姓が“ゴータマ”であるところから、“ゴータマ・ブッダ”となる。

そして、80才でその生涯をおえ、その歿年は紀元前383年2月15日であったから、逆算

すると紀元前463年生れとなる。シナの孔子の生れたのは紀元前551年だから、約88年あとに生れたことになり、今から2300年ぐらい前の人ということになる。

昔、昭和10年ごろ「主婦の友」にたのまれて“健康食と長寿食”というのをかいたが、それに仏典「観音経」の文章を引用したが、それを整理しないうちに戦災にあって焼亡したので、少し本文には適当ではないが、昭和16年「料理の友」に“食生活の理念”をかいて「巴利中阿含経」第70の文章から、

「比丘等よ、私は午後の食を止め、一日1度の食を取るようになってから、病もなく、健やかに安らかさを覚えるようになった。汝等も午後の食を止めて、一日1食にしたならば、よいであろうと思う」というのを引用したが、これは釈尊がペナレスのインベタナの鹿野苑からゴウサミに向う途中で、その通過の国の比丘等に論している語である。これに、「孟子」巻一の恵王章句の文章を続け、これらの先賢聖者の説を見ると、北方の広大な内陸の孟子は、肉食を勧め、南方熱帯圏のシャカは一食を勧めているが、これによって見ても、土地が異なり、気候が変れば、またその自然に対応して食物も異なることが判ると説明した」のを引用しておく。

シャカは医者ではないが、医学の知識は持っていた。

当時、インドでは総べての学術を分類して5とし、「五明」と称していた。シャカは王子としての教養のために、7才の時から、「帝王学」を学んだが、この「五明」もそのうちに含まれていたので、当然学んでいた。井上円了氏によると、この「五明」というのは、「声明」「因明」「医方明」「工巧明」「内明」の5つを指し、「医方明」は医治、四大不調、息病、寒熱等を、内容としていた。15才で太子となり、29才の時、城内をぬけ出して、求道生活の旅に出るまでの20数年の間、医学を学んだ筈である。これは、シナでいうと、いわゆる「六芸」に相当するものであった。

シャカは、布教のために旅をしたが、節制して歩きまわって生活したことが、永い生涯の健康を保つことができたらしく、「使い古した荷車のように、どうやら保っている」といった通り、死の前年の79才の時、旅先のガンジス川を泳いで渡って、小舟や筏を探していた弟子をおどろかしたことがある。

シャカが、マガダ国の首都王舎城に行く途中で、仏陀伽耶（ブダガヤ）により、高名な宗教家加葉（カシヨ）やその信徒多数に説教した。その時、その衆徒の先頭にいたカシヨは、一輪の花を面上に差し出し、シャカに示した。シャカは、そのカシヨの指示した一輪の花を見つけ、カシヨに向かってニコリと微笑した。カシヨはそのシャカを見上げ、またニコリと微笑して得心したことを示した。ここに両者の意志は完全に、とけ合ったわけであった。後世、この一事をもって“拈華微笑”という熟語を生んだという。カシヨはこれ

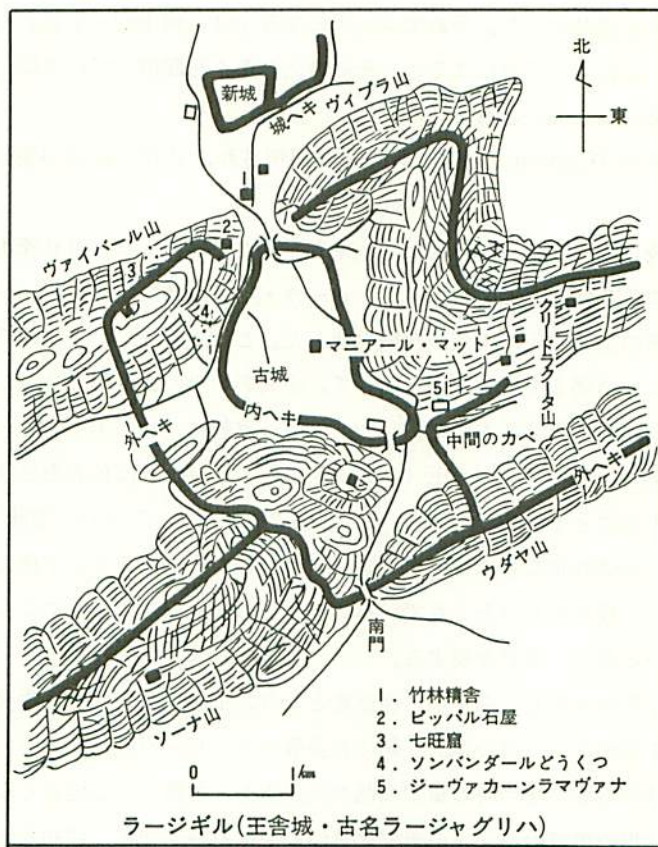


図1 コーサンビー著 山崎利男訳
インド古代史より引用

によって、その衆徒共ども仏教に帰依して、加葉尊者といわれる高弟となった。

それからカシヨらと一緒に、ヒマラヤ山脈の南麓でガンジス川の南にある丘陵と外壁にかこまれた40キロに及ぶ都市（古代インドの最初の「統一的君主国」の帝国であったマガダ王国首都）の王舎城（ラージギル・古名ラージャグリハ）に入り、ついで、外城内の北の霊鷲山（グリードラクータ）から北上し、クシナガラ城に入り、バラモン教の門徒を教化したが、その夜半、多くの仏徒と在家信徒に最後の訓戒を与えて、80才の生涯を閉じた。遺体は城外の天冠寺で荼毘（ダビ）に付され、遺骨はマガダ王国を初め他の8ヶ国に分骨され、仏閣が建てられて祀られた。

ジャカ入滅の後、まもなくその遺戒や教示、説話を確定して記録に留めるための集会が、その王舎城に第1回の結集がおこなわれ、500人からの仏弟子が参集した。その時、晩年の若い弟子にアーナンダという者がいたが、このアーナンダが絶えずジャカに従ひし

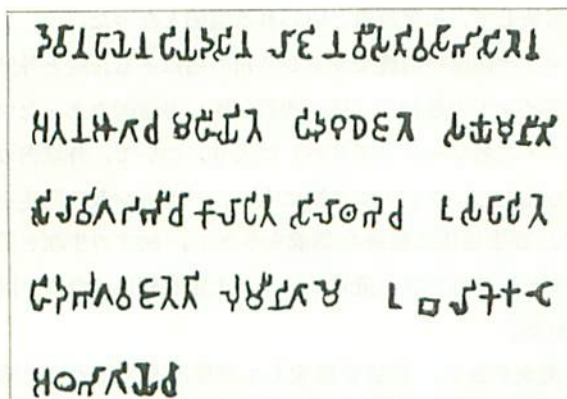
て、身のまわりを世話をした。それでシャカの生存中は、何千回とも知れない説教や教示は筆にされなかったが、伝説によると、その教えの多くを記憶していて伝えたのは、このアーナンダであったともいわれている。

その後、吠舍城 (Cravasti) で第2回の結集が催され、次第に仏説が整理統合されるようになった。

シャカ入滅後、約140年ぐらい経た時、中央アジアのバクトリヤ (孔雀王朝またはマウリヤ朝) の王に、3世として阿育王 (アショーカ・パーリ語でアソーカ) が出たが、王は仏教弘布と仏典の基礎確定に不滅の功績を残した。この王朝はアソーカの時は最盛時で、アフガニスタンの南部までその版図を拡げて、中央アジアの大帝国であった。ただ、このアソーカ王には同名の王が2人いて、シシーナーガ朝のマガダ王もアソーカといい、前五世紀の王であり、このアソーカ王 (バクトリヤ王・阿育王) は仏教を弘法した前二世紀の大アソーカ王のことである。“アソーカ”とは“憂いのない”という意味だそう。

アソーカ王は前270年ごろに帝位に即いたといわれ、この王のインド碑文は解説されたインド碑文では、最古のものとされている。種々ある文献記述は、時にこの2人のアソーカを混同しているので、注意を要する。

アソーカは仏教を信仰し、みずから優婆塞となり、不殺生を表明して生物愛護の勅令を出した。そして聖地にシャカの遺灰を納めた多数のストウーパ (仏塔) や、記念建造物を建て、石柱と摩崖の詔勅を当時の重要商路の交差点や、行政の中心地近くにおいた。そのうへ、ガンジス川の流域のシャカの重要な事件の跡に石柱を建て、詔勅を特に仏教教団に与えて、分裂と修学の行動を忠告した。



アショーカの碑文 (ルンミンディ石柱) プラーフミー文字で書かれ、インダス文明の文字を除くと、インドの現存最古の碑文に属する。

図2 コーサンビー著 山崎利男訳
インド古代史より引用



アソーカ王（三世）の一貨幣の印章を掲げた、アソーカ王には、この外数十にのぼる色々の型のものが発行された。

図 3 コーサンビー著 山崎利男訳
インド古代史より引用

紀元前 347 年には、第 3 回の仏教徒会議を催して 仏徒を結集して、“経”“律”“論”の三蔵にわたって、その異議を裁断し、仏教の弘隆をはかって、セイロン、中央アジア、そしてシナをも含んだ、すべての近隣諸国に伝導師を派遣している。パーリ語の仏典の現存する最古のものは、シャカ入滅直後に第 1 回の結集において、編纂されたといわれているが、今日みる内容のものは、アソーカ王の時、あるいは、そのころ編纂されたであろうと推察されるもので、現存するものは、パーリ語仏典で、セイロン、ビルマとタイに残っているとのことである。

その後、約 200 年を経て貴霜王朝の第三世にカニシカ王（144～173）が現われたが、この王朝は月氏の後裔で、人種的にはイラン系に属し、いわゆるクッシャン王国である。この王朝は中央アジア南部からアフガニスタン全土、そしてインドの国境はペナレスまで達していた。この王朝の三世カニシカ王は、みずからも仏教を信仰したが、それによって国政の統治の一方法ともした。そのため多くの寺院や塔婆をつくったりしたが、ついにカシミールの環林寺に第 4 回目の仏教徒会議を結集し、500 人の高い学識者と篤信の人々を招き、協議対論して、30万頌、660 万という 厩大（ぼうだい）な大註釈を編纂完成させた。

仏教がシナに渡ったのは、紀元前 62 年から 65 年ごろとされているが、後漢の明帝（58～75）の時代に、皇族の楚王の英が、仏教を信仰したことは、シナにおける最初の記録とされているが、その後、二世紀から六世紀にかけて、中央アジアの出身の僧侶で、シナに仏典を個人で将来した人々で、現在判明している人は、紀元 147 年に洛陽にきたシルカサン（支類迦讚）等月氏族 3 名、148 年に洛陽にきたブハラの人安世高 1 名、その後の人に、インド人 1 名、ソグド人 10 名、敦煌人 1 名、トカラ人 1 名、亀茲の人 1 名となっている。

シナからは、法顯（399 年）玄奘三蔵（624 年）等、史上高名の人々が、多く求道と仏典将来のために困難な、シルクロードを通して身毒（シンドはインドの 1 部でインドの西北方）に向っている。そして将来された仏典は、渡来僧やシナの高僧たちによって続々と漢訳されていった。玄奘三蔵のごときは、その訳業の成果「大般若波羅蜜多經」を始め

74部1335巻に達したという。

この仏典が、日本に初めて伝来されたのは、恐らくは、朝鮮から伝来したと思われるが、一般には紀元552年とされている。しかし、多くの学者の説によると、公式にはそうであろうが、実際に伝来したのは538年か、それ以前のことだとされている。

大体“インドの古代”は、コーサンビー氏（インド古代史の著者）もいう通り、歴史については、あらゆる方面について、文献的には皆無に等しい。従って言語学とか地質学とか考古学的な近代科学の方法によってのみ、類推する外はないもののようである。そうだとすると、それらの無いところを、少しでも依拠するとなると、仏典をたよりとする以外にはないのではないか、と思う。その点、仏典はインドとしては“救いの神”でもある。事実、狭義の百科辞典に等しい程、相当量、広範に各方面の事物を、その内から抽出できるはずである。医学においても又然りといいたい。その意味において、ここに仏典のおい立ちを、永々と羅列した訳である。

日本に伝来したシナの医学、いわゆる漢方医学を基本にして編纂された医書で、現存している最古のものは、十世紀のおわりに著作された鍼博士丹波康頼の「医心方」30巻が、何等変改されることなく、完全な姿で保存されている唯一のものである。

康頼はこの「医心方」を作るのに、漢方医書により、その出典を明記しているが、そのうちには、既にシナでは亡佚している医書も多数にあって「医心方」によってのみ、そのような医書が、過去のシナにあったことを知るというような、貴重本である。そのうちには、「素問靈樞」とか「病源候論」とか医書の名前は出るが、仏典からというのは存在しない。

なお、次手ながら、この「医心方」には、その第5巻に「歯科」のことが初めて記載されている。そして、この医書は当時医生に対する教科書として採用され、国家試験にはこの本によって、出題されていたことを附記しておく。

我が国で、仏典を調べて著されたのは鎌倉期で、その最初の本は「産生類聚抄」という産科の医書の上下2巻本である。その内容は第1章“求子産出”第2章“転女成男”第3章“解脫難産”第4章“所生長養”第5章“婦人殺事・治月水方”第6章“産生回起”の6章からなり、その典拠仏典は「尊勝儀軌」「寿命経」「不空罽索经」「准提陀羅尼经」「大集经」「随求经」「本願薬師经」「大仏頂经」「摩訶止観」「俱舍論」「勝鬘经」その他等であり、編著者は金沢文庫の監理寺であった、称名寺の初代長老であった妙性房審海とも、またその二代目長老であった明忍房餗阿であるともいわれている。前者は史上有名な良観房忍性（極楽寺）の要望によって、初代となった高僧で、寛喜元年（1229年）生れで、嘉元2年（1304年）76才で入寂、後者は旧名円智と称し、弘長元年（1261年）生れで、暦応元

年（1338年）78才で入寂した。この人が二代を継襲してから、称名寺は学僧が集まり、隆盛を極めたといわれた。このどちらの名僧が著したかは判然としない。

私はむかし10才のころ、亡父から大昔、著婆扁鵲（ギバヘンジャク）と華陀（カダ）という大変偉い医者がいた、ということを知られていたが、そのころは、名前の漢字も教わらなかったし、何分小さかったので、あゝそうか、そんな偉いお医者が2人いたのかと思っていた。そのうち大きくなって、18か19才のころ、それは2人ではなく、3人だということを知ったので、どんな字をかく人なのかと興味から調べ出した。そして、著婆（ギバ）はインドのお釈迦さんのお弟子で、外科の大家だったし、扁鵲（ヘンジャク）はシナの太昔の内科の大家で、司馬遷の「史記」に“倉公列伝”としてその伝記が出ていることを知り、華陀（カダ）はやはりシナの「三国志」にある魏の曹操の時代の人で、外科の大家、そして蜀の関羽の毒矢に当たった腕を治療したことなどを知った。

インドの古代医学のうちで特に輝々たる光彩を放っていたのは、このシャカの弟子であったギバの活躍によるといえるかも知れない。他の医学においても素晴らしい高度の医学であったが、外科手術の卓抜さは、今日から見ても、それが2500年以上前の医学かと、疑われる内容のもので、実に驚異的であった。大医ギバ（著婆）はマケイダ（摩揭陀）国の首都王舎城の瓶沙王（ビンサ・ビンビサラ・頻毘沙羅王）の王子無畏が、パラパタイ（婆羅跋提）という遊女に生ませた子供で、その遊女はその子を白衣につつんで、市中に捨てたが、翌朝王子無畏が車に乗って道を行くとき、これを見つけ、その棄子を実子とは知らずに、ひろって王城に連れ帰り、乳母をつけて養育した。そして幼年になった時、王子無畏が「この王城にいるつもりなら、何にか技術を修めなければならない、何にもできないで、徒らに王の禄を食んではいけない」と諭されたので、医になる決心をし、タクシラ国（トクシュシラ・得叉尺羅）にいた名医アダリ・ビンガラ（阿提梨・賓迦羅）の門にはいって、苦心修業すること7年、ビンガラの医術審査に合格した。その時、師のビンガラは“当代随一の名医だ。もう私は死んでも、お前がその後を継ぐから”といって絶讃してその将来を蜀望したという。

タクシラ国は王舎城の北西にあたり、中央アジアのサマルカンドの遙か南方で、ヒンドウクシュ山脈の南麓のクッジャン王朝（貴霜王朝）時代に冬の都城のあったベジャワールからは南東にあたり、そのころのインドでは最も文化の進んだ国だといわれ、ことに医学と芸術がすぐれていた。そこには医学校もあり、それを卒業した医師は特別な尊敬をうけたといわれた。その国で最高の医師とされたビンガラから絶讃されたギバは、インド第一の医師と称讃され、それにこたえてか、ギバの医療は最大の成果をあげていった。

最初の治療としてあげられるものは、バギヤダ（婆伽陀）城中の大長者夫人が頭痛を病

むこと12年、あらゆる名医老医の医療を受けたが、快方に向わなかった。その時ギバが強引に治療をし、灌鼻法を応用して癒したが、その初めは、門前で取りつがれた時、年少のためにギバは治療を拒否され、門前払いをくったという。経には著婆迦童子とある程だから、それから推すと、医を志したのは7、8才の時、7年の修業をへて医師となったのは、15、6才と想像されるから、無理からぬことではある。

ギバ童子の治病例の第二は、痔瘻の手術であった。

王舎城の瓶沙王（ビンシャ・ビンビサラ）は、大便中に出血する病を患った。そして侍女たちは「王がいま思っているのは、われら女と同じだ」と笑ったので、ビンシャ王はそれを聞いて慚愧し、すぐ王子の無畏王を呼んで「わたしは今このような病に苦しんでいる。わたしのために良医をさがせ」と命じた。そこで無畏は「ギバ童子は年少ですが医は巧みですから、今、城内におります。その病は、ギバなら治すでありましょう」といって、ギバに王の治療を命じた。

ギバはすぐビンシャ王のところにゆき、王の足に礼をし、王に「どこを患っているか、それはいつごろか、」などと色々と問診をし、その程度なら治療すれば直ぐなおることを告げ、治療にかかった。

ギバは近臣に命じて、鉄槽を取りよせ、暖水を一杯入れ、王をその中に入れて正座させ、それから水中に臥せさせ、暖水を王の頭から注ぎかけて呪文を唱えた。そのうちに王は眠ってしまった。ギバはそれを見届けて湯水を全部除いてから、利刀をとって王の患部を切り破り、瘡を浄洗しておえて好薬を局部に塗った。それがおわって病は除かれ瘡は癒え、まるで瘡などなかったようになった。そこで、また水を槽に満して、王に前のように頭から水を注ぎかけながら呪文を唱えたら、少したってから王は目を覚した。

王は直ぐ「病気の治療を早くしなければいかん」といわれたので、ギバは「患部は治療して治りました」と答えたので、王はいぶかりながら、手でさすって見たが、患部はすでに治り、その患部がどこだったかも、王には判らなかったので、王は「治療したというが何んの異状もない」とギバに問い質した。その時、ギバは「すでに治療はいたしました。が、傷跡などが残るようなことは、私はいたしません」と答えたという。

これによると、ギバは手術に際して、患者に苦痛をあたえないために、全身麻酔のかわりに、催眠術をかけて治療したもので、暖水に入れて、頭から暖水を注いだことは、催眠術を行うための一段階といしての方法だったと思われる。そして眠っている間に、一切の手術を完了したことを物語っているが、麻酔のかわりに催眠術を応用したことは、ギバの独創であると思われる、すばらしい着想である。

第三の治病例は、実に現代の私たちにとっては、驚嘆するばかりで、その事実を疑うよ

うな事柄である。これはアルコールによる全身麻酔であると共に、2千数百年前におこなわれたという、開頭手術である。すなわち、王舎城内に住む長者が、常に頭痛を患っていた。そして多くの医師がそれを診断したが、1人の医師は「7年後には死ぬ」といい、他の医師は6年といい、5年といい、その他の医師は7ヶ月、或は1ヶ月、あるいは7日しかもたなぬといった。そこで長者はたまたま、ピンシャ王にギバ童子に治療をたのんでくれと懇願した。王はすぐギバを呼んで、その治療を命じた。ギバは承諾して長者のもとに行き、長者を問診し、それなら私が治療をしようといった。

そこでギバは、長者に鹹食（塩辛いもの）を与えたところ、長者は口渴を訴え出したので、時をみて、酒を飲ませて酔わせてから、床にその身を繋いで手術を初めた。口渴を訴えるほど、塩辛いものを食べれば、酒の利き目は、普通の飲酒の量の倍のききめがあり、深く酔うことは当然のことである。ギバはよく酒の利害を知り、その特長を考勘して、アルコールによる麻酔を計ったものと思うが、酒酔を利しての全身麻酔を考えたことは、すばらしい前人未踏の方法である。

手術は頭皮を切り、頭頂骨を切り開いて脳の内部を見て、病巣を浄除してから、酥蜜を頭中において骨を合せて皮膚を縫合し、好薬を塗って手術を完了した。そして病状は回復したということであった。

ギバはこの前代末聞の脳手術ということ、どのような動機から思いついたのか、その病気を脳の手術によって、完治する確信を持ったのか、不思議に思うが、残念ながらその文からは、何病ということの推察も不可能ではあるが、とにかく、ギバの確信も、当時の高度に発達していたインド医学の知識と経験が、その基盤となっていたことだけは、たしかであると思われる。現代のように高度に発達しているといわれている外科医術においても、開頭手術などは、施設の完備している大病院、そして、その上に高度な熟練されている技術をもった人でも、相当な難手術である。いかにギバはすばらしい大医であったかを、感嘆する以外なものもないことを考えさせられる。

そのことは、第四例の治療例でもまた同断であった。第四例の治療例とは、腸閉塞の手術であった。

そのころ、クセンミ国（拘賤弥国）の長者の子が、輪上で1人嬉こんで遊んでいたところ、腸閉塞をおこし、それからは食物も消化しないし、便も出ず、粥を嘔っていたが、だんだんと痩せ出し、顔色も黄色となり、脈管は肢体に見えるようになった。そこでピンシャ王はギバ童子を呼んで治療をするよう命じた。ギバは車に乗って往診したところ、長者の家では、その子は死んだとして伎楽を鳴らして送り出すところであったが、ギバはその音声を聞いて「何んで、このような伎楽や鼓を鳴らすのか」と周囲の人々に聞き質した。周

囲の人たちは「アナタは来てくれたが、病人の子は、すでに死んだから、葬式を出すところだ」と答えた。

ギバはその言葉を聞き「子供はまだ死んではいない、すぐ屋敷に戻しなさい」と命じた。そしてすぐ車からおりて、仮死状態の子をねかせ、利刀を取り出して腸の結ばれているところを探ぐり出して、腸皮を切り、絡んでいる腸を取り出し、両親にそれを示して「この子が遊戯しているハズミに、このように腸が結ばれたので、いくら柔い粥でも消化しないで、脈管上皮に出るほど痩せてしまったものだ」といって、その腸をとき、元のところに納めてから、肉を合せて皮膚を縫い、好薬を創面に塗って手術を終った。その後、その長者の子は全癒したという。

これを見ると、ギバはその症状を見て、どうして腸閉塞と診断したのか、また手術をすれば、これは治癒すると判断したのか、やはり不思議と思わざるを得ない。これが2400～500年前のできごとである。

それより7～800年あとの三世紀のころ、シナの外科の大家だったカダ（華陀）が出て、この症状の患者を診察して、これは体内で腸が結ばれているが、針（鍼）や薬では治らない病気だ、すぐ手術をすれば治癒することができるという、麻沸散を酒で飲ませて全身麻酔をし、腹を切り開き、結ばれている腸をほどいて、よく洗って元に戻し、皮膚を縫い合せた。そして病気は治癒したということであった。

しかし我が国では、腸閉塞を手術で治癒させたということは、明治も末期からのことであるとされている。その前は、この病気のために多くの人々が、空しく死んでいった。

しかし、ギバのこの手術のとき、全身麻酔をしたとはかかれていないが、インドはその当時、最も毒薬の系統的な研究が進んでいたことは、ギリシャその他の国々でも、充分認めていたほどであることを考えると、何等かの方法がとられたか、それとも仮死状態のため、その必要がなかったかは、何んともいい切れないことである。

インドの医学、特にもっとも進んでいたといわれる外科手術では、ギバの前記の症例を考えれば、大体を推量できるが、その医療器具には、鋭器に20種、鈍器は101種の種類があり、その他は、ピンセット、鉗子、管、鉤、カテーテル、消息子などがあり、異物をとるためには、磁石、吸角、刀、ランセット、そして鋸から剪刀、針、套管針や繃帯材料の木綿、毛織物、木や竹製の副木材料、縫合に使われた縫合糸も準備され、手術の方法としては、剔出、切開から乱切、穿刺、消息子の検査、糖尿の検査、圧潰、縫合等が行われ、帝王切開も産科学の立場から、その一方法として行われていたという、高度発達のものであった。

そして、当時のインドの医師は総べて僧侶であったから「医師は病む人には慈父であ

り、癒えた人には良友である。健康を快復した人には保護者である。」というインドには古い諺があるとおりの、その信条の姿勢を示していたという。これは簡明ではあるが、立派な医戒でもあると思う。

紙数の関係もあるので、他を略して内科と臨床方面に移るが、内科では、臨床診断は進歩していた。問診は勿論だが、視診、触診、打診、聴診がすでに行われ、舌や皮膚、尿、特に尿の検査では甘味によって、糖尿病を診断し、脈搏の頻度やその整不整が目され、病証によって脈型の類別があり、風土病は詳論され、マラリヤの毎日熱、三日熱、四日熱も知られていた。間歇熱と弛張熱の区別があって、診断上の類症鑑別も既に行われていた。その上、日常の摂生の点はきびしく、飲食、起臥、衣服から運動、沐浴が規定され、清潔法が実行されていた。

治療面では肥瘠療法や減食療法が重視され、吸入や含嗽、沐浴、点滴から坐薬、塗擦、瀉血、そして必要時には注射も実施され、吐剤、下剤、灌腸剤の投与もあった。

このように治療方面が多岐にわたっていたから、従って薬材も豊富で、その点大きな特長でもあった。その薬材の一部を列記すると、

ゆりぐるま、各種果実酒、薬用酒、夾竹桃、大咲あやめ、うこん、においひつじぐさ、とうごま、こしょう、ひはつ、さとうきび、けい、大茴香、かぜくさ、ふうせんかづら、はまびし、さらそうじゅ、紅花、あんまろく、白檀、阿片、麻、大麻、ちょうせんあさがお（曼陀羅華）、インドとりかぶと

など。これに加えて、鉱物性薬剤として水銀があったが、これはおそらくアラビアからの伝来であろう、熱病や神経痛に使われ、梅毒なども白檀油と共に主要薬剤として、併用されたと思われる。

そして、前述したように、毒物の知識は非常に進歩していて、鉱物性と植物性、動物性の毒物に加えて、作物性腐敗毒のような特殊なものが研究された。この系統的な進んだ研究は、世界でも例を見ないもので、周辺の諸国の恐怖のまともでもあった。前323年バビロンで病歿したアレクサンドロス大王も、その中近東の遠征中に、その兵士が毒蛇に噛まれた時、このインド医学の優秀性や毒薬の知識を認めて、遠くインドに特使を送ってインドの医師を招いて治療させていた。

この毒物のうちでも、フグ毒につぐ猛毒といわれるトリカブト毒は、インドでも遠い古代から毒矢に使われていた。いわゆるトリカブト使用の狩猟民族は、戦闘にも使ったが、その範囲はネパール、北インドを起点としてS字状にシナの雲南、四川から満洲沿海洲を通過して北海道のエミシ（中世以後はアイヌ）、そして千島からアリューシャン列島やカナダまで達していた。しかし、それらは紀元前後には終ったらしいが、五世紀から八世紀

にかけて、我が国のエミシと同じく、インドでは、なお毒矢として使われたことが、「マヌの法典」に“武士たる者は、……憎むべき武器を使用してはならない、それは短刀、射込まれると抜けない逆鉤付矢、毒矢”という文献がある。

トリカブトの根塊である附子（ブシ）は漢名だが、ヒンディー語（インド北部）ではナヴィ、アッサム語（ヒマラヤの東南でインドの東北部）では、ビシュという。それで漢名の附子（ブシ）はアッサム語のビシュの音写だろうといわれている。また、トリカブト毒と併称されている猛毒のイボー毒がインド東北部からマライ半島方面で使われるが、そのうち、イボー毒はマライ半島のネグリト族ではイボー・ドクといい、ジャクン族は単に、ドクといっている。我々の観念の毒という言葉は、このあたりがその語源のように思われる。またトリカブトの根塊であるブシは烏頭（ウズ）と称される親根塊からできる娘根塊、つまり子供をいうのであるが、今日の薬学の本では同一のものとして統一しているようである。

これはおそらくは、有効成分が同一であるのにブシとウズという別名をつけては、まぎらわしいというところから統一したものであろう。

インドという国は、前述したように、第一に年代を確認することが困難で、シナのように各時代の王朝が作った、何々朝というような歴代の王朝史や、司馬遷のような大歴史家のかいた史書がない故、まづ周囲の国の王朝との関係事項を比定してゆくという方法を考える以外にはない。幸いにシャカという偉大な人物が出現したために、その年代は経文その他周囲の関連事項をつき合わせて、初めて知ることができる。従ってシャカの存在を中心において、当時の古代インドの医学を語る事ができる訳けである。その方法で、シャカ入寂後数百年を経た紀元前後の医学の状況を見ることも可能となる。よってシャカ自身が、信者個々を指導したり説教したり教示した個々の医学的なことは、またの機会に紹介することにし、シャカ時代以後のことに触れておく。

紀元前後には、クッシャン（貴霜王朝）王国のカニシカ王が第三世として現われ、前述のように仏典を整理し、極力仏教興隆につとめたが、そのころには、文化国といわれたタクシラにはシャカ以前からあった古い有名な大学が存続していて、多くの人たちが四方から集まって、特に医学や芸術が盛んに研究されていた。医学では教科書が使われたし、病院もあり、内科の名医にはチャラカ（Caraca）がいたが、チャラカはカニシカ王の待医をしたといわれ、外科にはスシュルタという名医がいて、内科、外科の2つに分けられていた。そして内科のチャラカの教科書には、多数の病名が記載され、それらの診断やその処置が併記され、入浴、食養生、健康法、育児法から外科手術、助産術などの医学教育が教授された。

外科のスシュルタは、各種の外科器具と共に、その手術を教え、四肢の切断から腹部切開や帝王切開、そして白内障の手術などまで行われ、死体の解剖も外科の学術課程の一環として教授されたようである。内科のチャラカは薬品についても植物性薬品は500種以上を知り、外科のスシュルタは同じく750種以上を知っていたといわれた。

こうに、インドの医学は進歩していたので、次第に全アジアに拡ろまり、シナ、トルキスタンからチベットに普及移入され、その古典は翻訳されたし、アラブ諸国では、インドの医書をサンスクリットから翻訳したという。

紀元260年ごろには、ペルシャのサーサーン朝の初代シャープール一世は、国内の組織の再編成が完成したので、医学、哲学など多方面にわたってインドの多くの文献を集めさせ、その翻訳を命じたといわれている。

最後に、まだ入手していないので、未見ではあるが、医学に関したお経の題名を列記して、特志の方々の御参考としたい。

薬師経（薬師琉璃光如来本願功德経）、大智度論、摩訶止観、摩訶僧祇律、十誦律、四分律、維摩経、除一切疾病陀羅尼経、金光明最勝王経、療病痔経、治痺病秘要経、呪時氣病経、呪齒経、医喻経、仏医経（医師に対する医学専門の経）、尊勝儀軌、寿命経、不空罽索経、准提陀羅尼経、大集経、随求経、大仏頂経、俱舎論、勝鬘経、婆羅門諸仙薬方（20巻）、婆羅門薬法（5巻）、竜樹菩薩薬方（4巻）、西域名医所集要方（4巻・参考）。

なお“呪齒経”については、何んというお経にあるか不明なので、調べるにも時間の関係で不可能なため、これを古田教授にお教示をお願いしたところ、即日お問合せいただき、そのお経は、“雑阿含経（ぞうあがん）”の第13、“阿摩昼経（あまちゅう）”の第14の“梵動經典”にあることをお知らせいただき感謝している。乍末尾ここに改めて記してお礼申上げる次第、その結果、この外にも、“治齒呪”“呪齲齒”“呪牙痛”，その他まだ相当あることが判明した故、ここに併記させていただく。

古代インドの医学覚書 参考文献

1. 中村 元著 ◇ゴータマ・ブッタ◇
2. 西村 貞次著 ◇世界古代文化史◇
3. 井上 哲次郎著 ◇釈迦牟尼伝◇
4. 大類 純著 ◇世界百科辞典◇
5. 小川 政修著 ◇西洋医学史◇
6. J. ネール著 ◇インドの発見◇
7. シルビアン・レビ著 ◇インドの文化史◇
8. コーサンビー著 ◇インド古代史◇
9. ロマン・ギルシュマン著 ◇イランの古代文化◇
10. 井上 円了著 ◇外道哲学◇
11. 前嶋 信次著 ◇玄奘三蔵◇
12. 長沢 和俊著 ◇シルク・ロード◇
13. 岩村 忍著 ◇シルク・ロード◇
14. 加藤 九柞著 ◇埋もれたシルク・ロード◇
15. 深田 久弥著 ◇シルク・ロード◇
16. 森 豊著 ◇葡萄唐草◇(シルク・ロードの幻想)
17. 松本 信広著 ◇ベトナム民族小史◇
18. 鯖田 豊之著 ◇肉食の思想◇
19. 西田 龍雄著 ◇西夏文字◇
20. 吉川 幸次郎著 ◇漢の武帝◇
21. 石川 元助著 ◇毒矢の文化◇
22. 結城 陸郎著 ◇金沢文庫と足利学校◇
23. 釈 宗演著 ◇碧巖録講話◇
24. 釈 宗演著 ◇観音経講話◇
25. 丹波 康頼著 ◇医心方◇
26. 司馬 遷著 ◇史記◇
27. 吉川 英治著 ◇三国志◇
28. 渡辺 照宏著 ◇お経の話◇
29. 服部 敏良著 ◇釈迦の医学◇
30. 釈 迦 述 ◇巴利中阿含経◇
31. 釈 迦 述 ◇賢愚経◇
32. 大日方 大乘著 ◇仏教医学の研究◇
33. 清水 藤太郎著 ◇日本薬学史◇
34. 石塚 左玄著 ◇化学的食養長寿論◇

その他◇国訳一切経◇の律・並◇国訳大蔵経の論◇に医学関係多数あるも略す。